

マタイ 6:5-15 「心の内なる聖所」

「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたがたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。御心が行なわれますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください』 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」

わたしたちは今日、ものごとの二面性ということを、考えなければなりません。ものごとの表面的な部分。そうして、ものごとの隠れたところにある、本質的な部分。こういう二面性であります。そうして、しばしば、外側の表面と、内側の本質とが、食い違うことがある。主イエスキリストは、そこへわたしたちの注意を引きつけておられます。

礼拝所の高い所や、町の大通りの人目につくところ。そういうところでもって堂々と、荘厳な、流暢な、確信に満ちた言葉でもって、神への祈りと賛美をささげている人たち。わたしたちの目は、わたしたちの耳は、それにすっかり魅了されてしまいます。なんて立派な祈り、なんて堂々とした祈り、なんて信仰に満ちた祈りをする人たちだろうか！

しかし、それはものごとの外側、ものごとの表面的な部分にしか過ぎない、と主イエスキリストはおっしゃるのです。人目に見て立派なお祈りをささげている人が、実はその心の内側、その人の本質の部分においては、むなしくて、さびしくて、怒りや、ずるさや、不平や不満や、欲で満ちていることがあるのだ。その外側の立派さと、その内側の貧しさが、あまりに食い違っていることがあ

るのだ。そういうことがある、と主イエスキリストは、ご指摘なさっておられます。

イエス様が教えていたもうところの、お祈りの本質とは、何でありましょうか？それは、子どもがお父さんとお話するようなことだ。イエス様は、そういうシンプルな、そういう美しいとらえかたをなさっておられます。「あなたの父に祈りなさい」そうイエス様はわたしたちを、祈りへと招いておいでです。

別の所でイエス様は、小さな子どもを祝福して、こう言われました。「天の国はこのような者たちのものである」(19:14) 主イエスキリストは、ここにおいて、わたしたちと神様との関係が、ちょうど、小さな子どもとその父親との間の信頼と愛情に満ちた関係と一緒にある、ということを示してくださっています。

わたしたちが、わたしたちの父なる神様のみふところの中へ、まっすぐ飛び込んで行くような、単純な信頼。父なる神様から注がれてくるところの愛情を素直に信頼して、まっすぐ飛び込んで行くような、心のありよう。そういう心こそが、祈りにおいて本質的に重要なのであります。

そういうことになりますと、それ以外のことがら、つまり、わたしたちがお祈りをするときに、人前にあって、堂々と祈れない、流暢に祈れない、荘重な文語体を駆使して祈るなんてとても出来ない、おずおずとしか祈れない、つかえつかえしか祈れない、うまいことふさわしい言葉を見つけられない、そういうたぐいの心配は、すべて非本質的なことがら、本質ならざることがら、枝葉のことがらなのであって、どうでもよろしい、ということになります。

主イエスキリストは、あなたは隠れた、だれも見えないところへ行って、あなたの父なる神へ、単純率直な信頼をもって、あなたの心を、そのまんま注ぎ出しなさい、うまくお祈りできるだろうかなん心配は無用なのだ、ということをおっしゃっておられるのです。

そして、主イエス様は、それとは対極にあるところの危険性を、警告なさっておられます。すなわち、長年にわたって宗教的な訓練を受けて、堂々と祈れるようになり、流暢に祈れるようになり、荘重な文語体を駆使して祈れるようになり、確信に満ちて、立て板に水を流すごとく、適切で間違いのない言葉をもって、いつでも人前で祈れるようになった人が、しかし、その心の奥深いところにおいて、本質において、神との関係が切れてしまっている。長年の習慣で、

外目に立派に祈れるようになってはいるけれども、もうその心の奥底のところでは、幼子とその父を信頼してまっすぐ飛び込んで行くような単純率直な信仰が、なくなってしまっている。そういう危険に、あなたがたはよくよく気をつけなさい。そうイエス様はわたしたちに警告なさっておられるのです。

単純率直な信仰。すなわち、イエス様がわたくしの罪のために、このわたくしの罪のために、死んでくださった。よみがえってくださった。だから、わたしは赦されて救われた。このイエス様をとおしてわたしは父なる神様とつながっている。いつでもどこでも神様に愛され、守られ、祝福されて生きることができる。この神様のみふところに、いつでもまっすぐ飛び込んで行くことが出来る。こういう単純率直な信仰であります。

これは、どんな宝よりも稀有な宝であります。しかし、この宝、単純率直な信仰という宝を持っていない人は、どういうふうになってしまうのでしょうか？

単純率直な信仰が失われるにつれて、わたしたちの心の中には、神の善意への疑い、というものがだんだん生じてまいります。それはすなわち、不安であり、恐れであり、疑いであります。

こんな祈り方じゃ足りないんじゃないだろうか。もっと工夫を凝らした祈り方をしなければ、喜んでいただけないんじゃないだろうか。神様は、そうやすやすとお祈りを聞いてくださるお方では「ない」はずだから、言葉数をもっと多くしなければならぬんじゃないだろうか。

もしそういう、不安と恐れと疑いが先立つ考えによって、長々とくどいお祈りをするのであれば、それは、まことの神を知らない、ほんとうに神様を信頼して一切お任せするという境地に生きているのでない、あの異邦人たちがやっていることと、何ら変わりがないじゃないか。そうイエス様は、わたしたちに注意しておられます。

愛情深い父親は、自分の幼い子どもに何が必要かを、子どもが願い求める先から全部わかっていて、あらかじめちゃんと用意している。人間の父親だってそうなのだ。ましてや、天の父なる神様が、わたしたちにどれほどよくしてくださらないことがあるだろうか。だから、その神様を信頼して、あなた自身の単純率直な言葉でお祈りなさい。その場合、ほかの人が、あなたのお祈りをどう聞くか、どう思うか、どういう点数をつけるか、そんなことは気にしてはいけ

ない。お祈りは、あなたと父なる神様との間の一對一の心のやりとりだ。イエス様は、そういうお祈りへと、わたしたちを導いておられるのです。

そうは言いましても、お祈りの仕方がまったくわからないわたしたちにとっては、お祈りの見本となるものが、どうしても必要です。そこで、主イエスキリストは、ご自身みずからお祈りの手本をわたしたちに示してくださいました。それが、主の祈りであります。

主の祈りの構造は、大きく三つに分けることができます。

第一は、子どもであるわたしたちが、父である神様に服することにあります。服すること。わたしたちが父を父と認めて、その父の保護のもとに、子としての自分をまったく委ねることにあります。

あんたなんか父だとは認めない、とか、父であってもあんたの言うことなんか聞くもんか、という態度であっては、父と子の関係など成り立ちません。まず何よりも、わたしたちが何を願うよりも、わたしたちが何をするよりも、まず最初にしなければならないことは、わたしたちが、父を父と認めて、父の愛情深い保護のもとに、子としての自分をまったく委ねる、ということにあります。これを最初にしなければなりません。

具体的には、父の名をあがめる、父が治めたもう国を求める、父の心がそのまま自分の上に行なわれることを求める、ということにあります。

お父さん。わたしはあなたの万年筆がどうしても欲しいのです。しかし、お父さん、あなたが家長として治めているこの家に住むのは窮屈で御免です。お父さん。わたしは実はあなたの言いなりなんかなりたくないのです。わたしたちは、知らず知らずそういう身勝手なお祈りをしていないのでしょうか？ 主の祈りの第一は、服すること。父に服すること。父を父と認めて、父の保護のもとに、子としての自分をまったく委ねることである、と覚えましょう。

第二は、自分の必要を神様にはっきり申し上げる、ということにあります。自分の必要が、こうだ、と神様に申し上げます。

なぜ自分の必要を言わなければならないのでしょうか？ それは先ほどの主イエスのお言葉、「神はあなたがたが願う前から必要を全部ご存じだ」というのと

矛盾してやいないでしょうか？ 神様がもうすっかり全部ご存じなら、われわれが何も言わなくていい、ということになるのじゃないでしょうか？

しかし、わたしたちが自分の必要を神様に申し上げる、ということをしてないのであるならば、わたしたちと神様との関係は、何も言葉が行き交うことのない、何も心が通い合うことのない、何も願いと願い、思いと思いが触れ合うことのない、無機的な、命の通わない、冷たい関係になってしまうであらう。

それはちょうど、部屋の中に閉じこもりっきりになっているわたしたちのところへ、時間になると、外からこつこつ誰かやって来て、ドアの下の穴のところへ、おぼんに載せたご飯をすっと黙って差し入れ、そして、こつこつと去って行ってしまふ。そしてまたきっかり時間が来たなら、こつこつと誰かやって来て、穴からご飯をすっと差し入れ、また去って行ってしまふ。そんな同じことを毎日100年も繰り返しながら、しかし、いっさいまったく言葉をかけあうということがない。それどころか、お互い顔も見たことがない。声も聞いたことがない。むこうから聞かないし、こちらから声をかけたこともない。そういうわけだから、ありがとうなんて、一度も言ったことがない。そんな、冷たい関係になってしまうのではないのでしょうか？

心を通い合わせるために、言葉を交し合うことが必要です。いつでも言葉を交わしあい、心を通わせ合っていて、はじめて沈黙の中で、阿吽の呼吸で、お互いがお互いの思いを一瞬のうちに把握できる、という境地になるのでしょう。

ですから、天の父なる神様は、わたしたちの必要を、それが何であつて、いづれぐらい必要なのかということは、もうすっかり全部ご存じで、それをわたしたちにくださるために、わたしたちがお祈りする前から、ずっともう備えてらっしゃる。

わたしたちはわたしたちの方で、この天の父なる神様は、わたしたちの救いのために、ご自分の一番大切なひとり子イエス様さえ惜しまず十字架につけてくださったほど恵み深い神様だから、わたしたちが声に出す前から、もうわたしたちが必要なものは全部わかつて、ちゃんと用意してくださっている。そういう父なる神様だということを、わたしたちはちゃんとわかっている。その上で、わたしたちは、心を通い合わせ、生きた、命の通った、あたたかな関係を持つために、声に出して、自分の必要を、父なる神様に率直に申し上げなければならぬということです。

それが主の祈りの第二の部分、自分の必要を神様にはっきり申し上げるという、具体的には、毎日の食べ物を求める、罪の赦しを求める、誘惑からの守りを求める、悪しき者からの救いを求める、ということであります。

そうして第三番目に、この主の祈りの中核にある大切なことがらは「赦し」であります。すなわち、父なる神様が、その愛するひとり子イエスを十字架につけるまでして、わたしたちのために勝ち取ってくださった、尊い罪の赦しがあります。「神様、罪深いわたしを赦してください」と祈る。すると「子よ、御子イエスの血のゆえに、おまえの罪は赦された」と神様がおっしゃってくださる。ここにわたしたちの大きな喜び、大きな平安、大きな祝福があります。

そうして、この赦しのお恵みこそが、わたしたちと神様との関係を、可能にし、維持し、深くしているものなのです。

ところが、もし、わたしたちの側の心の中に「赦せない」という思いがあったなら、このせつかくの神様との命の通った関係が、ブロックされてしまって、ふさがれてしまって、血行障害のようになってしまって、命が通い合わなくなり、あたたかさがなくなってしまうことになるのです。

そこで、主の祈りにおいて第三に重要なのが、赦し、赦され、ということでもあります。主イエスはおっしゃいました。「もしあなたが、人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もしあなたが、人の過ちを赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」(6:15)

これはいったい、規則の問題ではありません。赦したから赦す、赦さないから赦さない、という杓子定規な規則の問題ではありません。そうではなく、命の問題です。わたしたちと神様との関係を可能にせしめているもの。わたしたちと神様との関係を維持せしめているもの。わたしたちと神様との関係を深くせしめているもの。それは、主イエスキリストの十字架による罪の赦しです。この赦しのお恵みがあってこそ、わたしたちは「アバ、父よ！」と叫んで、神様にお祈りし、神様と親しく交わることができるのです。ですから「赦し」こそ、わたしたちと神様との関係の一番中心にあって働いている力です。そういうわけですから、もしわたしたちが、赦しとは全然反対の苦い心を持っているなら、それが、わたしたちと神様とのお恵みに基づいた関係を、だめにしてしまう、

命の通わない、冷たいものにしてしまう、ということなのです。この点を、わたしたちは気をつけて、悔い改めなければなりません。

どうか、わたしたちが、自分の過去のすべてを赦していただいて、今日こうしてお恵みに与っているお互いなのですから、他人に対してもまた、たとえ腹を立てたり怒ったりすることがあるとしても、他人に対して恵み深くあろうとすることが、できますように。どうか、わたしたちの心の内にある苦いものを、神様によって取り除いていただいて、わたしたちの「心の内なる聖所」をすっかりきよめていただいて、そうして、そこで、心の中で、心の内なる聖所において、神様との何らへだてのない交わりを楽しむ者であることができますように、祈りたいと思います。祈りましょう。

祈り

神様。あなたを、わたしたちの父として認めます。そうして、子としての自分を、父であるあなたの保護のもとに、まったくおゆだねし、まったくお任せいたします。まったくお任せしたのですから、どうか、すべての要らざる思い煩いから、わたしたちを解放してください。

神様。あなたに、わたしたちの必要を申し上げます。どうか、父であるあなたが、子であるわたしたちの必要をお満たしてくださいますように。いつでも、どこでも、どんなときでも、わたしたちの必要を、父であるあなたに、率直に申し上げますことができますように。

神様。あなたが、御子イエスキリストの十字架によって、わたしたちをすべて赦してくださいましたように、わたしたちも、御子イエスキリストの十字架のゆえに、すべての他人を赦することができますように。たとえ今は赦せないとしても、どうかあなたが、わたしたちの心をすっかりきよめてくださって、他人を赦することができる心に、わたしたちを変えてください。

この、自分の心の中、自分の心の聖所の中から、すべてのわだかまりが取り去られて、神様、あなたとの何らへだてのない交わりを楽しむ者であることができますように、どうか、わたしたちの祈りをお導きください。

主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン